

巻頭の辞

神戸市立病院紀要の第 59 巻が発刊の運びとなりました。本紀要に「肝細胞癌に対する外科治療の進歩と最近のトピックス」と題する貴重な総説をお寄せいただいた西市民病院有井病院長をはじめ、症例報告や部局の活動報告をお纏めいただいた各病院のスタッフ諸君、さらには編集委員の皆さまに厚く御礼を申し上げます。

紀要は私たち神戸市民病院機構の研究水準を示すのみならず、同時に臨床の水準をも示すものであると思います。と言いますのも、従来、医学・医療は研究か臨床かという対極で議論されてきましたが、私はそうではないのではないかと考えているからです。ベッドサイドで患者の訴えを丁寧に拾うことができる臨床医は、ベンチに座っても他者が誤差として捨てたデータの中に真実が宿っていることに気づきます。臨床に必要な活力と研究を進める知力とは大概同じ源泉から湧き出ているようです。とりわけ、臨床データの収集と解析の手法が格段に進歩し、細胞や動物に頼らなくても、実臨床から病態の核心の迫る研究をなしえる時代を迎えた今日、両者は対極ではなく、相補的な関係にあることがむしろ当たり前になってきました。我々のような沢山の症例を扱う医療機関の時代がやってきたとも謂うことができます。

従って本紀要は、私たちこの 1 年間の努力を客観的に表す指標です。半世紀を超えて綿々と指標が積み重ねられてきたことには大いなる意味があります。そして今日の指標の立ち位置をそれでよしとするのか、更にもっとと考えるのか、それも私たちに問われていることだと自覚したいと思います。

神戸市立医療センター中央市民病院

院長 木原康樹